

一般情勢報告

二

日本労働組合連合会長

伊藤卯四郎

故に第七回年次大會を迎えるに當つて、我が九州聯合會の過去一ヶ年の運動を回顧すれば誠に感慨無量にして同志諸君の不撓の努力と犠牲に対する、深甚の謝意と敬意を捧げねばならぬ。

國際情勢に就いては昨年の大會報告書に述べられてゐるところと余り大きな相異は起されてはゐない。即ち世界經濟會議の野垂れ死的失敗は世界各國の排他的國家主義經濟對立を激化させ、從來の國際協調主義は排斥されて、世界各國は競つて國產品の強制的使用、物價吊上げ政策の強行、軍需インフレ、匡救資金の放出、極端なる労働條件の劣悪化、労働階級を犠牲に供した生産費の削減と關稅高壓に依つて國外市場の獲得競争に奔命し、以て國內產業の繁榮を企てたが、かゝる姑息的な彌縫策では到底、資本主義機構の奥深く内蔵する缺陷を除去するを得ず、世界資本主義は瀕死前夜の苦闘の中で必死のアガキを繰り返してゐるのである。

世界資本主義の一環をなす我が國の國內情勢は列國が依然として深刻なる產業不況と反動ファシズム運動の横行とそれの破綻を苦悶してゐるのに、獨り日本の資本主義はインフレ景氣で多少安定をしてゐるかの様に見られてゐる。日本のインフレ景氣の中心は軍需インフレであつて一九三五、六年の國際危機を目標にして今や日本のインフレ景氣はその最高潮に達して居る。この景氣は政府の借金と公債による人造的、一時的、偏頗的な國民を犠牲にして作り出した景氣であるから斷じて永続性を持つものではなく、昭和十一年の「ソドン軍縮會議」を最後にして必然的に停止されるものである。所謂一九三五、六年の國際非當時は政治的外交で解決されるべきものであるが、昭和十一年以來の軍需インフレの行ひ詰りから起る國內產業の萎縮、不況

の大風こそ實に労働階級の非常時とも稱すべきものであろう。

軍需產業に於ける労働賃金は稍々増大されてゐるに見えるが、これは全く、労働の強化、労働時間の強制的延長に依るものであつて、しかもインフレーション政策の强行で物價は暴騰し、労働階級の質的收入は減少の一途を辿るのみである。

軍需產業以外の部門に於ける労働階級の生活實狀は農村の窮乏と共に言語不通する悲惨そのものであつて、労働階級によつて軍需インフレの悪果は皆無である。労働階級の不満と生活苦は刻々に増大してゐるが、労働階級の純情を寄貯とし、非常時局の空名を以て現實をカムフラージュし、労働争議の激發を辛うじて阻止してゐるのであつてインフレに依る日本の國內產業の多少の安定は極めてジメ～した陰惨なものと稱すべきである。

かかる情勢下に於いて健資なる労働組合主義は日本労働組合會議の結成並に内部の充實強化に依り、その產業協力の誠心と共に社會的信賴を得て、昨年末には日本の國內產業を健資に再建する基準を示す方針として「產業と労働の統制」に就き政府へ重大なる建議を要請し、政府要路の大官、學者、代表的資本家、並に労働組合代表百數十人を招待して、この建議に對する意見を求め、これが實現に協力を仰ぐための座談會を開催した。我が九州聯合會に於ても第五回年次大會の決議を以て労資懇談會の開催を提倡し、協調會並に福岡縣廳の非常なる努力に依つて全國に亘りて首先に福岡市に於て労資懇談會を實現させ、既に回を重ねること四回、回を追ふ毎に會議は益々盛大になりその意義は愈々深くなつてゐる。福岡に於ける労資懇談會の成功が岸火線とたつて労資懇談會は全國的に確立されるようになり既に内務省社會局に於ては労資懇談會を通じて復雜なる労資問題並に國家產業と労働の關係を統制、指導する基準を作り出すために明年度豫算へその費用を計上するに至つたのは健資なる労働組合運動が社會的信賴を贏ち得た實証に外ならぬ。

九州聯合會は國家產業の維持、發展に協力し、分配の公正を期し、以て労働階級の徹底的解放を實現するために、この一年は社會的健資なる労働組合運動を強調させ、政府として労資問題の解決、指導の基準を作り出させる運動の方針に重点を置き、輕薄無責任なる極左、極右の思想運動を九州の戰線から總退却させ、労働組合の平和的、建設的職責に主力を注ぎ、健資なる労働組合主義の大旗を掲げて堂々前途を續けたのである。